

令和元年6月11日現在

機関番号：33902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02446

研究課題名(和文)学際的なライフ・ライティングの枠組みで捉えるメタバイオグラフィーの系譜の研究

研究課題名(英文)A Genealogy of Metabiography in the Interdisciplinary Context of Life-Writing

研究代表者

星 久美子(HOSHI, Kumiko)

愛知学院大学・文学部・准教授

研究者番号：20572142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「ライフ・ライティング」という学際的・分野横断的な枠組みの中で、従来の伝統的な伝記とは異なる「メタバイオグラフィー」を系譜的に研究することを目的として行われた。たとえば、モダニズム期に書かれた「メタバイオグラフィー」であるヴァージニア・ウルフの『フラッシュ(Flush)』(1933)やポストモダンの時代に書かれた「バイオフィクション」であるヘレン・ダンモアの『暗黒のゼナー(Zenor in Darkness)』(1994)を考察した結果、共通の特徴「ジャンル曖昧性」、「ファクトとフィクションの融合」、「自己言及性や間テクスト性」、及び「伝記作家の主体性」などが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、近年、注目されている「ライフ・ライティング」という学際的・分野横断的な枠組みの中で、従来の伝統的な伝記とは異なる「メタバイオグラフィー」を系譜的に研究することによって、文学研究を超える新たなアプローチを示したことである。また、「メタバイオグラフィー」や「バイオフィクション」も非常に新しいジャンルであり、それらを研究することにより文学研究においても新たな視点をもたらした。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to show a genealogy of “metabiography” and explored it in the interdisciplinary context of life-writing. “Metabiography,” considered to have arisen in the period of modernism, differs from traditional biography, and has been widely discussed in the twentieth-first century literature. The examination of modern and postmodern “metabiographies” and “metabiographical novels,” including Virginia Woolf’s *Flush* (1933) and Helen Dunmore’s *Zenor in Darkness* (1944), revealed notable characteristics of this new genre: 1) it blurs genre distinctions; 2) it crosses the boundaries between fact and fiction; 3) it is self-reflexive and intertextual; and 4) it presents more about the biographer than the biographee.

研究分野：英文学

キーワード：ライフ・ライティング メタバイオグラフィー バイオフィクション

1. 研究開始当初の背景

本研究のそもそもの着想は、2009年に東京女子大学に提出した博士論文“D. H. Lawrence’s Representations of Relativity: With Special Reference to the Cultural Climate of Modernity Before Einstein” (D・H・ロレンスによる相対性の表象：アインシュタイン以前のモダニティーの文化的風土において)を執筆する過程で得られた。

1) 科学史におけるアインシュタインの位置づけを調べる際に読んだ科学者の伝記作品(たとえば、パトリシア・ファラの『ニュートン伝』(2002))が従来の伝統的な伝記とはまったく異なり、いわば「伝記についての伝記」という意味で「メタバイオグラフィー」呼びうるのではないか。

2) ロレンス研究を進める中で読んだA・J・A・シモンズの『コルヴォーを探して』(1934)は、伝統的な伝記とも、「伝記についての伝記」とも異なっていたが、「伝記を書いていく過程を明らかにする伝記」という意味で「メタバイオグラフィー」に分類できるのではないか。後者については、ジュリアン・バーンズの『フロベールの鸚鵡』(1984)やA・S・バイアットの『抱擁』(1990)などのポストモダン小説にも同じ傾向が見られることから、「メタバイオグラフィー」から「メタバイオグラフィカル・フィクション」へと発展しているのではないかと考えた。

以上の着想に基づき、平成26年度に科研費「挑戦的萌芽研究」として採択された「『メタバイオグラフィー』の学際的研究を通じたモダニズム・ポストモダニズム再考」という研究題目では、以下の研究成果が得られた。

1) 文学史の中でバイオグラフィーの系譜を辿り、「メタバイオグラフィー」の誕生が20世紀初頭、とくにリットン・ストレイチーやヴァージニア・ウルフなどが活躍したモダニズムの時期であることを確認した。

2) 「メタバイオグラフィー」の特徴を明らかにし、「伝記についての伝記」と「伝記を書いていく過程を明らかにする伝記」の二種類があることを明らかにした。

3) 二種類の「メタバイオグラフィー」のうち、「伝記を書いていく過程を明らかにする伝記」に該当する作品として、ジェフ・ダイヤーの『怒りに任せて：D・H・ロレンスとの格闘』(1997)を考察し、その特徴一すなわち、「ジャンル曖昧性」、「ファクトとフィクションの融合」、「自己言及性や間テクスト性」、および「伝記作家の主体性」一を明らかにした。

これらの研究成果に基づき、「メタバイオグラフィー」研究を以下の点でさらに発展させる可能性があるのではないかと考えた。

1) モダニズムの時代に書かれた伝記には「メタバイオグラフィー」の特徴を示すものが多い。リットン・ストレイチーやハロルド・ニコルソンによる伝記などが該当する。

2) モダニズムの時代に書かれた小説には、「メタバイオグラフィー」を発展させた「メタバイオグラフィカル・フィクション」と称されうる作品が多い。ヴァージニア・ウルフの『オーランド』(1928)や『フラッシュ』(1933)などが挙げられる。

3) モダニズム作品がポストモダンの時代に書かれた「メタバイオグラフィー」および「メタバイオグラフィカル・フィクション」に影響を与えた可能性が大きい。

4) 「メタバイオグラフィー」および「メタバイオグラフィカル・フィクション」は「ライフ・ライティング」という、学際的で、分野横断的な研究分野で考察することで、文学研究における新たな視点をもたらすのではないか。

近年、「ライフ・ライティング」は、新しい学際的研究領域として注目されている。国外、とくに英国では、Centre for Life-Writing Research (King’s College London)やOxford Centre for Life-Writingが中心となって学会開催や情報発信を積極的に行っている。

また、「メタバイオグラフィー」は、『オックスフォード英語辞典』(Oxford English Dictionary, or OED)の最新版(2009)やEncyclopedia of Life Writing (2001)にも記載がない新しい用語である。この用語が使われ出したのは、2003年頃のものである。2003年11月21日号の『タイムズ文芸付録』(Times Literary Supplement)に掲載されているパトリシア・ファラ(Patricia Fara)の『ニュートン伝』(Newton: The Making of Genius 2002)に関する書評でこの伝記を「メタバイオグラフィー」と称しているのを皮切りに、2004年に創刊された学術誌『ライフ・ライティング』(Life Writing)の「編集記」(Editorial)では「『メタバイオグラフィー』と呼ばれる新しいカテゴリーの誕生」を宣言している。2005年に出版されたニコラス・A・ルプケ(Nicolaas A. Rupke)の『フンボルト伝』(Alexander von Humboldt: A Metabiography)が「メタバイオグラフィー」という副題を有し、同年に出版されたSelf-Reflexivity in Literatureに“Fictional Metabiographies and Metaautobiographies: Towards a Definition, Typology and Analysis of Self-Reflexive Hybrid Metagenres”と題された論文が収録されている。

さらに、「メタバイオグラフィカル・フィクション」および「バイオグラフィカル・フィクション」は新しい文学ジャンルであり、国外では「バイオフィクション」と称されるジャンルの一部として議論されることが多い。たとえば、University of Minnesota (米国)のMichael Lackeyは2015年に「バイオフィクション」をテーマにしたメーリングリストを開設し、MLA年次総会においても「バイオフィクション」に関するセッションを計画するなど、活発な研究活動を始めている。

以上のように、「ライフ・ライティング」、「メタバイオグラフィー」、「メタバイオグラフィカル・フィクション」の研究は、国外においては最先端の研究であり、国内ではまだ十分に行わ

れていないことから、本研究の意義は大きいと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、近年、注目されてきている、「ライフ・ライティング」という学際的・分野横断的枠組みの中で、従来の伝統的な伝記とは異なる「メタバイオグラフィー」を系譜的に研究することを主目的とした。「メタバイオグラフィー」は、20世紀後半から21世紀にかけて、文学だけではなく科学史や芸術史などさまざまな分野で執筆されている。時を同じくして、「メタバイオグラフィー」を発展させた「メタバイオグラフィカル・フィクション」も、数多くの作品が発表され、「バイオフィクション」という新しいジャンルとして研究され始めている。本研究では、「メタバイオグラフィー」の系譜を20世紀前半まで遡って辿ることで、モダニズムとポストモダニズムの連関性を明らかにし、文学研究に新たな視点をもたらすことを目指した。

## 3. 研究の方法

本研究は、以下の方法で遂行された。

### (1) 文献資料・情報の収集および分析

本研究の着想を得てから文献資料は収集しているが、「ライフ・ライティング」、「メタバイオグラフィー」および「バイオフィクション」に関しては、毎年、新しい文献が出版されるため、文献資料の収集を行った。また、伝記研究、とくにライフ・ライティング研究は、国内よりもむしろ国外で盛んに行われているため、口頭発表を行った二回の国際学会（“2016 Annual Conference of the British Association for Victorian Studies”、“International D.H. Lawrence Conference St Ives Cornwall”）および出席した国際学会（“The Book as Cure: Bibliotherapy and Literary Caregiving from the First World War to the Present”）において最新の情報を収集し、文学だけではなく歴史学、社会学、教育学、心理学などを専門とする幅広い研究者と意見交換を行った。また、夏期休暇には、オックスフォード大学附属図書館（英国）において、研究テーマに関連する文献資料の収集を集中的に行った。このように収集した文献資料及び情報は、分析の上、計二回の国際学会での口頭発表と二本の論文に反映されている。

### (2) 国内・国際学会での口頭発表の原稿執筆および視覚資料お準備、口頭発表、出席者との意見交換

収集した文献資料および情報を元に、二回の国際学会（“2016 Annual Conference of the British Association for Victorian Studies”、“International D.H. Lawrence Conference St Ives Cornwall”）で口頭発表を行うため、原稿を英語で執筆し、パワーポイントによる視覚資料を作成した。口頭発表を行い、それに引き続き行われた出席者との意見交換を通して、さらなる知見を得ることができた。

### (3) 論文の執筆

前回の科研費採択課題の研究成果であった第13回国際D・H・ロレンス学会での“Reading Geoff Dyer's *Out of Sheer Rage: Wrestling with D. H. Lawrence as a Metabiography*”という題目の口頭発表の原稿を元に、今回の採択課題の研究で得た新たな知見を加え、英語論文として書き直し、『英文学研究支部統合号』に投稿、掲載された。また、二回の国際学会での口頭発表のうち、“2016 Annual Conference of the British Association for Victorian Studies”で口頭発表を行ったヴァージニア・ウルフの『フラッシュ』（1933）に関する原稿を英語論文として書き直し、『愛知学院大学文学部紀要』（第47巻）に掲載した。さらに、“International D.H. Lawrence Conference St Ives Cornwall”で口頭発表を行ったヘレン・ダンモアの『暗闇のゼナー』（1994）に関する原稿は、順次、論文にして国内外のジャーナルに投稿し、発表する準備を進めている。

## 4. 研究成果

各年度の研究成果は以下の通りである。

### (1) 平成28年度

平成27年6月にガルニャーノ（イタリア）で行われた第13回国際D・H・ロレンス学会での口頭発表の原稿を大幅に改訂し、日本英文学会中部支部に投稿、日本英文学会支部統合号に掲載された。その論文において、「メタバイオグラフィー」の特徴一すなわち、「ジャンル曖昧性」、「ファクトとフィクションの融合」、「自己言及性及や間テクスト性」および「伝記作家の主体性」を明らかにした。

平成28年8月31日（水）から9月2日（金）にかけてカーディフ（英国）で行われたBAVS（The British Association for Victorian Studies）主催の国際学会において東京女子大学准教授ニール・アディソン氏と同非常勤講師中妻結氏とともにパネル発表を行い、ヴァージニア・ウルフ

フの『フラッシュ』(1933)について、「メタバイオグラフィー」の特徴、とくに「ジャンルの曖昧性」、「ファクトとフィクションの融合」、「自己言及性」がどのように表れているかの考察を行った。

平成 28 年 9 月 12 日(月)から 14 日(水)にかけてセント・アイブズ(英国)で行われた国際学会において、ヘレン・ダンモアの『暗黒のゼナー』(1994)について「メタバイオグラフィー」の特徴、とくに「ファクトとフィクションの融合」と「間テクスト性」の観点から考察し、口頭発表を行った。

(2) 平成 29 年度

平成 28 年 8 月 31 日(水)から 9 月 2 日(金)にかけてカーディフ(英国)で行われた国際学会でのパネル発表の原稿を大幅に改訂し、英語論文“Virginia Woolf’s *Flush*: Fictional Metabiography/Metabiographical Fiction”として『愛知学院大学文学部紀要』(第 47 号)に投稿、掲載された。

(3) 平成 30 年度

平成 28 年 9 月 12 日(月)から 14 日(水)にかけてセント・アイブズ(英国)で行われた国際学会での原稿を大幅に改訂し、英語論文として投稿する準備を行った。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

HOSHI, Kumiko, *The Evolution of a Hybrid Genre in Geoff Dyer’s Out of Sheer Rage: From Menippean Satire to Meta- Auto/Biography*, 英文学研究支部統合号『中部英文学』、査読有、9 巻、2017、pp.9-20

HOSHI, Kumiko, *Virginia Woolf’s Flush: Fictional Metabiography/Metabiographical Fiction*, 『愛知学院大学文学部紀要』第 47 巻、2017、pp.27-32

〔学会発表〕(計 2 件)

HOSHI, Kumiko, *Appropriating Lawrence’s Life: Helen Dunmore’s Zennor in Darkness*, International D.H. Lawrence Conference St Ives Cornwall 2016 年 09 月 12 日~ 2016 年 09 月 14 日、セント・アイブズ、英国

HOSHI, Kumiko, *Inspired by Elizabeth Barrett Browning: Reading Virginia Woolf’s Flush as a Fictional Metabiography*, 2016 Annual Conference of the British Association for Victorian Studies, 2016 年 9 月 1 日、カーディフ大学(カーディフ、英国)

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。